

原著 (Article)

保育環境の安全基準に関する日豪比較

——園庭の環境づくりに焦点をあてて——

Comparative study between Australia and Japan on nursery school safety standards: Focus on playground safety

野田 舞*

NODA, Mai*

山田 真紀**

YAMADA, Maki**

キーワード：保育，園庭，安全基準，日本，オーストラリア，国際比較

Key words : nursery school, playground, safety standard, Australia, Japan, comparative study

1. はじめに

保育施設は，子ども達が健やかに成長することが期待される場であり，大きな怪我をしたり，命が危険にさらされたりすることがあってはならない。しかしながら実際には，こうした事故が絶えることはない。園庭や遊具に関わる事故については，現代の日本では，維持管理のための予算や，事故が発生した時の保障に莫大な経費がかかることから，「危なそうなものは撤去」という発想で対処されることが多い。子ども達のチャレンジ精神や楽しみを損なうことなく，安全・安心が確保される方法はないのだろうか。

桑原ら¹⁾は，事故成立メカニズムのモデルに基づく分析より，遊具の事故ではほぼ5割が落下であり，これに転落，転倒，衝突を加えた4つの型がほぼ9割を占めること，利用者側，遊具側，周辺環境の3つの要因が相互に重なり合って事故が発生すること，発端要因は利用者側，直接要因は遊具側と周辺環境の要因が中心であるため，事故対策としてはこれらの除去による安全対策と改善が効果的であることを明らかにしている。一方，西田ら²⁾は，遊具における事故の増加により，遊具が撤去され，魅力的な子どもの遊び空間が減少してゆくことに危機感を覚え，データに基づいた安全な遊具のデザイン・設計の方法論について論じている。彼らは保育園で調査を行い，「大人が手を出しすぎず，できる限り子ども達に自由に遊ばせ，その遊びのなかで，子どもたち自らチャレンジと失敗を繰り返しながら危険を学んでいく環境を構築するには，実は，大人が，あらかじめ遊具のどこに危険があるのか，どの程度，子ども達は把握できるのかを知った上で，遊具をデザインすることが不可欠」であること，「日常行動や日常のひやり・はっとデータに基づく遊具改善」が大切であるとの知見を提示している。また，出来³⁾は，日本の「都市公団における遊具の安全確保に関す

* 椋山女学園大学大学院教育学研究科，大学院生 ** 椋山女学園大学教育学部／教育学研究科
椋山女学園大学教育学部紀要 投稿・執筆規程の2により査読を行った（2014年11月11日受付；
2014年12月25日受理）

る指針」，ヨーロッパの「欧州規格」，アメリカの「CPSC ハンドブック」，イギリスの「遊びの安全性ガイドライン」の4つの遊具の安全確保に関する指針を取り上げ，その特徴を明らかにしている。「ヨーロッパ型（リスク管理・ハザード除去型）」とアメリカ型（危険性除去型）の違いがあるが，計画・設計段階，製造・施工段階，維持管理段階，利用段階ごとの安全管理，物的要因と人的要因を同時に扱っている点では共通しており，遊具の安全管理においては，総合的な取り組みが世界的な共通認識になっている」ことを明らかにしている。

以上の先行研究で指摘されたように，保育施設に設置される遊具にかかわる事故の発生メカニズムを把握し，事故の発生メカニズムを下敷きにした安全な遊具の設計とデザインを行うこと，そして，遊具の設計・設置・維持・補修の国家基準を策定していくことは，遊具での事故を減らすために必要なことである。しかしながら，「子どもと遊具の関わり方」「大人はどのような配慮をすればいいのか」という人と道具の関係性についての研究が不足している。つまり，出来³⁾の指摘する方向で事例を蓄積する必要があると考えられる。

そこで本研究では，次の2つの分析を行う。第一に，保育施設における安全基準を，網羅的で一覧性のある形でまとめているオーストラリアを取り上げ，保育施設において安全や安心に配慮すべき領域を明らかにするとともに，日本の基準と比較することにより，日本の基準面での問題点を洗い出すこと，第二に，園庭や遊具における基準の日豪比較を行うことにより，日本の基準の特徴や問題点を明らかにすることである。

2. 方 法

オーストラリアでは，『保育施設における健康と安全：モデルとなる政策と実践 Health & Safety in Children's Centres Model Policies & Practices』⁴⁾が出版され，保育施設における健康と安全についての網羅的で一覧性のある基準が社会的に共有されている。231ページに渡るこの書籍は，「オーストラリアの幼い子ども達 Early Childhood Australia (NSW 支局)」，「NSW 子どもサービスの健康と安全委員会 The NSW Children's Services Health and Safety Committee」から委託されて，ニューサウスウェールズ大学の「公共の健康と地域社会の医療学部 School of Public Health and Community Medicine」の教授陣がまとめた。第1版は1994年に，第2版は2003年に出版されている。本研究では，この書籍を研究材料とした。

なお，「保育施設」として，日本の保育園と幼稚園に相当するものを想定するが，オーストラリアでは，それに加えて「移動式の保育施設」というものが含まれる。「移動式の保育施設」とは，日本の移動図書館のような形態で，車両に遊具と保育者を載せて，定期的に地域の公園において保育サービスを提供するものであり，近隣の未就園児が保育と遊びの機会を得るものである。

3. 結果と考察

3-1. 日豪の安全基準全体の比較

オーストラリアの基準の目次は巻末に資料として掲載した（参考資料1）。この基準に対応する日本の基準をまとめたものが表1である。表1からは以下の4点が読み取れる。第一に、オーストラリアは、網羅的で一覧性のある基準を設けている一方で、日本では、文部科学省、厚生労働省、内閣府、国土交通省を始め、さまざまな機関がそれぞれ独立して基準を設けており、基準へのアクセスが難しく、かつ全貌を掴むことが容易ではないという現状がある。保育に関連する基準を網羅的に含む媒体がないことが問題である。

第二に、オーストラリアには、日本にはない項目が見られた。それは、保育スタッフのための安全配慮について記述された「保育者のための健康と安全」という項目である。保育の安全基準というと、子ども達の安全をいかに確保するか、という発想になり、文部科学省、厚生労働省の編集した基準や通達を検索しても、保育者の安全基準に関するものは皆無であった。下位領域には、「妊娠している保育者の健康と安全」という領域もある。日本では、保育者の精神障害や燃え尽き症候群、保育者の流産率の高さが問題になっている⁵⁾。保育者が心身の健康を維持し、仕事を続けていける環境を整えることは、保育の質の向上にもつながるだろう。

第三に、日本には、オーストラリアにはない項目が見られた。日本は地震や津波などの自然災害が多いため、災害から子ども達を守るための安全基準が設けられており、避難訓練は月に1回以上行わなければならない等の基準が定められている。保育に関する安全基準は、国際的に共通する部分も多いと思われるが、自然環境や文化的背景により、差異が生じる部分もあるため、比較の際に注意する必要がある。

第四に、表1を見ると、保育において安全や健康に配慮すべき領域にはどのようなものがあるのか、ということが分かる。子ども達が健康で安全に過ごすためには、インフルエンザや嘔吐下痢症などの伝染病をいかに拡散させず、子ども達の健康を守るかという「伝染病の管理」、てんかん 癲癇、ぜんそく 喘息、糖尿病などの持病をもつ子ども達へ、適切な対応を取ることができるようにするための「持病への対応」、食物アレルギーや食物による窒息などの事故から子ども達を守るための「食物の管理」、子どもの排泄物を適切に管理し、また、調理室から食中毒を出さないための「衛生の管理」、壁紙や家具からのホルムアルデヒドの滲出、扉の指はさみ、階段や遊具からの転落などが起きないようにするための「施設面の整備」、かぶれを引き起こすような毒虫や毒植物から子ども達を守る「自然環境の管理」、プールの事故や小さな玩具の呑み込みによる窒息を防ぐための「遊具の適切な管理」、園外での保育を行う際の交通事故の防止や子どもの紛失を防ぐための「園外での安全」などである。

我々は、これらの「子どもの健康と安全を守るために配慮すべき領域」のうち、「園庭と遊具の安全」についてさらに詳しく比較を行う。なぜなら日本では、園庭や

表1 オーストラリアと日本の保育に関する安全基準の比較

領域	下位領域	内容	対応する日本の基準
伝染病の予防	感染予防	感染予防のための一般的なルール、手洗い、排泄、おむつ替え、鼻をふく、血や体液との接触、掃除	1) 学校において予防すべき感染症の解説（平成25年3月、文部科学省） 2) 保育所における感染症対策ガイドライン（平成24年11月、厚生労働省）
	伝染病	伝染病あるいは急病の子どもの隔離、深刻なあるいは潜在的な伝染病の病気の評価、伝染病のケースにおける通知手順	
	免疫	免疫の管理	
病気やその他の状況への対応	薬物投与と手当の対応	薬物投与の対応、急な発熱のある子どもの対応、医学的な手当の介入を必要とする慢性疾患をもつ子どもの対応、針やとがっているものの取扱い・利用・処理	1) 学校のアレルギー疾患に対する取組ガイドライン（平成20年3月、文部科学省） 2) 保育所保育指針解説書（平成20年4月、厚生労働省） 3) 病児保育事業について（平成26年1月、内閣府） 4) 病児・病後児保育について（平成21年9月、厚生労働省） 5) 慢性疾患を抱える子どもとその家族への支援の在り方—報告—（平成25年12月、厚生労働省）
	喘息、糖尿病、癲癇（てんかん）、食アレルギー、アナフィラキシーをもつ子ども達の対応	喘息持ちの子ども達の対応、糖尿病持ちの子ども達の対応、食アレルギーとアナフィラキシーの対応、深刻なアレルギーとアナフィラキシーのリスクの軽減	1) 学校のアレルギー疾患に対する取組ガイドライン（平成20年3月、文部科学省） 2) 保育所におけるアレルギー対応ガイドライン（平成23年3月、厚生労働省）
	その他の医学的状況	SIDS（乳幼児突然死症候群）のリスク軽減と乳児の睡眠事故の防止、歯と口の健康、再発性中耳炎の対応と予防、窒息時の対応	1) 乳幼児突然死症候群（SIDS）に関するガイドライン（平成17年、厚生労働省） 2) 小児急性中耳炎診療ガイドライン（平成25年6月、日本耳鼻科学会、日本小児耳鼻咽喉科学会、日本耳鼻咽喉科感染症・エアロゾル学会） 3) 「生きる力」をはぐくむ学校での歯・口の健康づくり（平成23年3月、文部科学省） 4) 健康日本21—歯の健康—（平成12年3月、厚生労働省）
緊急時の対応	緊急時の手順	緊急時の手当の権限、救急車を呼ぶための手順、応急手当の情報と連絡先、火事と緊急避難手順	1) 保育所におけるアレルギー対応ガイドライン（平成23年3月、厚生労働省） 2) 学校での応急処置・対応（平成23年7月、日本学校保健会） 3) 保育所における災害時対応マニュアル給食編（平成26年1月、日本栄養士会） 4) 文部科学白書（平成23年度、文部科学省）
	連絡	急な病気や怪我の場合の家族への連絡、病気や怪我の記録をつけること、緊急時に医療専門職と情報交換すること、守秘義務	1) 学校における子供の心のケア（平成26年3月、文部科学省） 2) 保育所保育指針（平成20年4月、厚生労働省）
	法律と保険	法律と保険の適応範囲	1) 学校防災マニュアル（地震・津波災害）作成の手引き（平成24年3月、文部科学省）

食の安全、栄養と身体活動	食の安全、栄養と身体活動	安全な食べ物の取り扱い、食べ物・栄養・教育、身体活動	<ol style="list-style-type: none"> 1) 児童福祉施設における食事の提供ガイドー児童福祉施設における食事の提供及び栄養管理に関する研究会報告書ー（平成22年3月、厚生労働省雇用均等・児童家庭局母子保健課） 2) 保育所におけるアレルギー対応ガイドライン（平成23年3月、厚生労働省） 3) 調理上における洗浄・消毒マニュアル（平成21年3月、文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課） 4) 第2次食育推進基本計画（平成25年12月、内閣府） 5) 保育所における食事の提供ガイドライン（平成24年3月、厚生労働省） 6) 幼児期運動指針（平成24年3月、文部科学省）
屋内と屋外の安全管理	屋内の安全性	屋内の安全チェックリスト、汚れたおむつの清掃・廃棄・保管、子ども達とペットや動物の間の接触、玩具の安全、保育園の家具や設備の安全	<ol style="list-style-type: none"> 1) 幼稚園施設整備指針（平成21年3月、文部科学省） 2) 保育所における感染症対策ガイドライン（平成24年11月、厚生労働省） 3) 学校における望ましい動物飼育の在り方（平成15年4月、日本初等理科教育研究会） 4) 保育所におけるアレルギー対応ガイドライン（平成23年3月、厚生労働省） 5) 玩具安全（ST）基準（平成26年7月閲覧、一般社団法人日本玩具協会） 6) 乳幼児用玩具の安全性（平成17年12月、独立行政法人国民センター）
	屋外の安全性	屋外の安全チェックリスト、遊び場遊具、蛇・蜘蛛・昆虫に対する予防策、太陽の安全、プールと水の安全性、危険性のある植物	<ol style="list-style-type: none"> 1) 幼稚園施設整備指針（平成21年3月、文部科学省） 2) 都市公園における遊具の安全確保に関する指針（改訂版）（平成20年8月、国土交通省） 3) 学校生活における紫外線対策に関する具体的指針（平成23年10月、日本臨床皮膚科医会） 4) プールの安全標準指針（平成19年3月、文部科学省・国土交通省） 5) 遊泳用プールの衛生基準について（平成4年4月、文部科学省） 6) 安全管理ハンドブック（NPO法人自然体験活動推進協議会）
	他の環境面での危険性	建物のメンテナンスチェックリスト、改築の手順、鉛の露出防止、アスベストの露出防止、農業の安全な使用、危険な化学製品・物質・道具の保管、屋内のアレルゲン	<ol style="list-style-type: none"> 1) 幼稚園施設整備指針（平成21年3月、文部科学省） 2) 第17章 鉛ベース塗料（平成14年12月、日本環境管理基準） 3) 健康的な学習環境を確保するためにー有害な化学物質の室内濃度低減に向けてー（平成23年3月、文部科学省） 4) 保育所におけるアレルギー対応ガイドライン（平成23年3月、厚生労働省） 5) [改訂版] 学校環境衛生マニュアル（平成22年3月、文部科学省）
	旅行と遠足	旅行と遠足の安全とチェックリスト、安全な遠足の場所、農場での子どもの安全の予防策	<ol style="list-style-type: none"> 1) 保育所におけるアレルギー対応ガイドライン（平成23年3月、厚生労働省） 2) 「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育（平成22年3月、文部科学省）

	子ども保護	子ども保護の実践	※厚生労働省および文部科学省には記載なし。
保育スタッフのための健康と安全	保育スタッフの健康と安全	バックケアと補助、ストレス管理、保育スタッフの免疫化と伝染病問題、ゴムアレルギー	
	妊娠している保育スタッフの健康と安全	妊娠中の保育スタッフのバックケア・補助・その他の健康問題、妊娠中の保育スタッフのストレス管理、妊娠中の保育スタッフの免疫化と伝染病問題	

遊具に関する事故件数が多いこと⁶⁾、また、日本では一度事故が起きると、類似する遊具は撤去されるという現状があり、我々はそれを残念に感じ、他の対応策を探ってみたいと考えているからである。

3-2. 日豪の園庭と遊具に関する安全基準の比較

(1) 園庭と遊具に関する日本の安全基準

日本の遊具の安全基準には、国土交通省の「都市公園における遊具の安全確保に関する指針」と、日本公園施設業協会の「遊具の安全に関する規準」がある。平成26年6月に二回目の改訂がなされ、「都市公園における遊具の安全確保に関する指針(改訂第2版)」⁷⁾と「遊具の安全に関する規準 SPFA-SP-S: 2014」⁸⁾が、現在の日本における遊具の安全基準となっている。

国土交通省による指針によれば、遊具の安全確保に関する基本的な考え方は、「子どもは遊びを通じて冒険や挑戦をし、心身の能力を高めていくものであり、遊具の安全確保に当たっては、こうした遊びの価値を尊重して、リスクを適切に管理するとともに、ハザードの除去に務めること」⁹⁾としている。リスクは「子どもが危険を予測し、どのように対処すれば良いか判断可能な危険性」とされ、ハザードは「事故につながる危険性あるいは子どもが判断不可能な危険性」と定義されている¹⁰⁾。除去すべきハザードには、遊具の構造、施工、維持管理の不備による「物的ハザード」と、利用者の不適切な行動や服装、年齢・能力に適していない利用による「人的ハザード」の2つがある。特に、重大な遊具事故につながるおそれのある物的ハザードを中心に除去するため、遊具の計画・設計段階、製造・施工段階、維持管理段階、利用段階の各段階で、適切な対策を行う必要があると述べられている。また、人的ハザードに関しては、子どもや保護者、保育者が連携して取り組む必要があるとされている¹¹⁾。

遊具の計画・設計段階における遊具の構造については、絡まり・ひっかかり対策、可動部との衝突対策、落下対策、挟み込み対策、その他の危険対策、救助対策等の安全対策がなされ、なおかつ、子どもの利用や遊具の構造に応じた強度を保つ必要があると述べられている¹²⁾。

遊具の製造・施工段階における使用材料は、「子どもが直接触れたり、舐めることを考慮して、身体に悪影響を及ぼすおそれのある物質を含まない耐久性のあるもの」とし、加工時には切傷や刺傷等の怪我の原因となる部分をつくらないようにし、仕上

げには保護効果のある表面処理，防腐処理，腐蟻処理を行い，材料の接合に関しては，十分な強度を確保し溶接する必要があると述べられている¹³⁾。

利用段階では，遊具の利用状況を把握し，維持管理や改修等に活かすことが必要となる。また，事故を未然に防ぐために，自らの服装や遊具の異常にも注意を払えるように，安全管理の啓発と指導を行っていかねばならないとも述べられている¹⁴⁾。

維持管理段階においては，「遊具そのものの性能確保に関する点検・補修を行うに

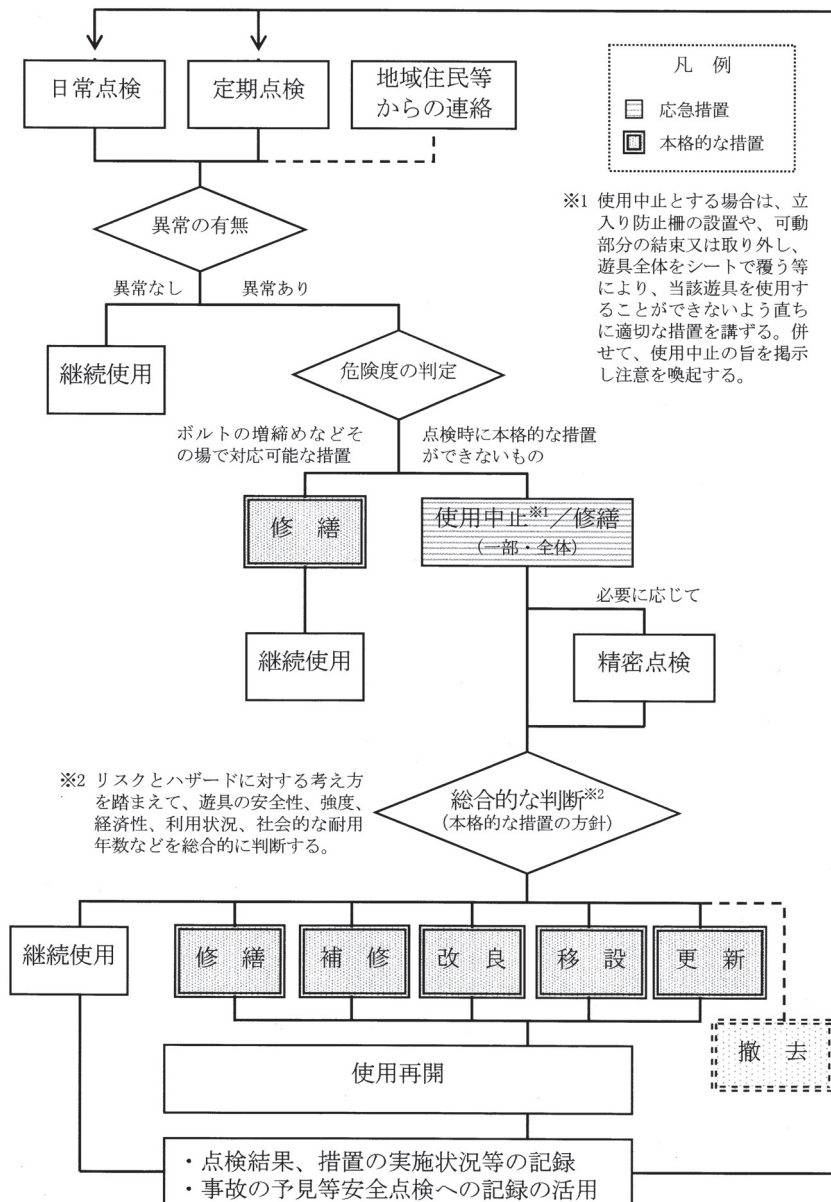


図2 物的ハザードの発見から本格的な措置までの流れ

(国土交通省指針58頁より転載)

とどまらず、子どもにとって安全で楽しい遊び場であるかという視点を持って行うことが必要である。遊具の構造や劣化などを要因とする物的ハザードの発見・除去を中心に確実な安全点検を行うとともに、定期的な修繕などの維持管理を行うため、維持管理計画を策定・実行し、維持管理の履歴を記録・保管する¹⁵⁾とされている。安全点検の種類には、製造・施工者が遊具設置直後に行う初期点検、遊具管理者が行う日常点検及び定期点検、専門技術者が行う精密点検がある。安全点検にて発見されたハザードの措置については、図2に示した。

住民の苦情により使用中止になり、その後、撤去となる遊具が少なくないが、このフローチャートによると、「点検時に本格的な措置ができないもの」が使用中止となり、その後、修繕・補修・改良・移設・更新を経て、使用再開になるが、それが不可能の場合に、撤去という措置となることが示されている。継続使用になるか、修繕するか、撤去するかは、「リスクとハザードに対する考え方を踏まえて、遊具の安全性、強度、経済性、利用状況、社会的な耐用年数などを総合的に判断する」とされている。

国土交通省と日本公園施設業協会の2つの基準策定により、法的な力はないものの、子どもに安全な環境を与えていくために必要なことや気をつけるべきことが定まり、遊具の安全性は改善の途についたといえるだろう¹⁶⁾。

(2) 園庭と遊具に関するオーストラリアの安全基準

園庭と遊具に関するオーストラリアの安全基準は、『保育施設における健康と安全：モデルとなる政策と実践』の「屋内と屋外の安全の管理」の章において示されている。この章には、5節があり、「屋内の安全」「屋外の安全」「その他の環境的ハザード」「旅行と遠足」「子ども保護」という観点から安全基準が定められている。オーストラリアの安全基準の具体的なイメージがつかめるように、巻末に、「屋外の安全」の部分の翻訳を掲載した（参考資料2）。

園庭と遊具に関する基準は、「屋外の安全」の節に記述されている。その下位には、「屋外における安全チェックリスト」「園庭の遊具」「蛇、蜘蛛、昆虫に対する注意」「太陽の安全」「プールと水の安全」「危険な植物」の6つの項目が並んでいる。

本文中では、項目ごとに、安全を維持する基本的な考え方を示す「方針」、どうしてこのような配慮が必要なのかを示す「背景」、ここに書かれている基準が準拠している「関連する法律」、より詳しい情報が入手できるサイトやNGOなどの組織を紹介する「重要な情報」、日々の保育において目配りをし、対処しなければならない具体的な項目を示す「チェックリスト」、あるいは「実践」からなっている。

安全基準の記載は、日本と同じように「50センチを超える高さの遊具には、少なくとも深さ25センチ、遊具の周囲1.9メートルに衝撃吸収材を敷いていることを確認すること。園庭の遊具は、小道や硬い花壇の縁から離して設置すること」という基準を示す記述もある。しかしほとんどが、「常に子ども達を監視し、園庭の遊び場は目

の届くこと。こどもが園庭にいるとき、よく使うもの（例えばティッシュ、電話、日焼け止め、救急箱など）は手の届くところに置いておくこと」などのように、保育者の具体的な行動に言及する記述からなる。例えばこの一文は、ティッシュや電話を取りにいくために、少し目を離れたときに落下などの事故が起こりうることを示しており、このようなことが起きないように、日頃から保育者はどのように行動すべきか、という具体的な行動指針を示すものとなっている。

(3) 日本とオーストラリアの安全基準の違い

日本とオーストラリアの安全基準を比較すると、以下の4つのことに気付く。第一に、我々の行った分析によると、オーストラリアには、現在、網羅的で一覧性のある安全基準が存在するものの、「参考」として数多くの法令や基準が挙げられていることから、出版前は、現在の日本と同じような状況であったことが推測される。

第二に、保育場面の健康と安全に必要な基準について、保育者の視点から、網羅的で一覧性のある書籍をまとめることの意義は高いということである。この書籍は総ページ231頁におよぶが、それだけ保育の場面では健康と安全のために配慮しなければならない事項が多いことを示しており、もしこのような書籍がなければ、保育者は関連する法令や基準を自分で探し出し、詳細すぎる記述から自分たちに必要な情報を読み取り、現場に生かしていくという非常に手間のかかる作業をしなければならない。オーストラリアの基準は、保育場面に必要な情報だけを、チェックリストという形で非常に分かりやすく記述しており、非常勤やパートの職員であっても、目を通せば自分たちに何が求められているのかを、すぐに理解できる内容となっている。保育における健康と安全に配慮の必要な事項について、保育に関わるすべての人が、その全体像を把握しているというのは、保育の質の向上に欠かせないだろう。

第三に、園庭と遊具の安全基準を見ただけでも、オーストラリアという地域の特性がよく分かるということである。オーストラリアはオゾンホールのある南極に近く、紫外線の影響による皮膚ガンの発症率が世界一高い。また、オーストラリアには、猛毒をもつ蛇や蜘蛛が多数生息しており、また、アレルギーを引き起こし、かぶれの原因となる植物も少なくない。こうした自然環境が保育環境にもたらす危険を少しでも減らすために、日々の配慮と対処が必要であることが読み取れる。

第四に、日本の安全基準の記述は、詳細で、しっかりと読みこなすと、日常の保育に役立つ情報がたくさん盛り込まれているということである。例えば、さまざまな怪我への対応策は具体的で分かりやすく、また衛生管理についても記述が豊かである。また、日本には、オーストラリアのような保育者への支援についての記述はないものの、保護者への支援についての記述はある。しかしながら、日本では、幼稚園は文部科学省、保育園は厚生労働省と、管轄する省庁が異なるため、同じ保育に関わる基準であるのに、文部科学省の安全基準には含まれている内容が、厚生労働省の基準には含まれていないなど、統一に欠ける部分がある。

3-3. 日本における統一的な安全基準の必要性

日本では、保育者の社会的威信が低く、待遇面で恵まれないことから離職率が高く、絶対数が不足している¹⁷⁾。一方で、待機児童が社会問題となるなかで、その解消のため、保育園の新設が進むという状況となり、経験豊かな保育士の不足から保育の質の低下が指摘されている¹⁸⁾。この質の低下が、子ども達の健康や安全の確保に悪影響を及ぼす可能性がある。本研究を通して、オーストラリアの網羅的で一覧性のある安全基準が日本にもあれば、非常に有益であろうということを感じた。すべての保育に関わる人々が、手軽に手に取ることができ、保育者が本当に知りたいこと、知っておくべきことが分かりやすい表現で書かれている本があれば、きっと日本の保育の質の向上に役立つだろう。ただし、いくらマニュアルを整備しても、その量が膨大であれば、読まれず、結果としてリスクの低減にはつながらない。また、保育者養成や現職教育の場面などで、保育者がマニュアルを学ぶ場を確保していく必要もある。このような観点を大切にしながら、文部科学省と厚生労働省が協力して、このような書籍の編集が進められることを願っている。

■参考文献・註

- 1) 桑原淳司・仙田満・矢田努「幼児施設の園庭遊具における事故とその安全性について」『ランドスケープ研究』60(5) 1997年, 639-642頁。
- 2) 西田佳史, 本村陽一, 北村光司, 山中龍宏「子どもの日常行動の科学に基づく遊具のデザイン」『オペレーションズ・リサーチ経営の科学』55(8), 2010年, 466-472頁。
- 3) 出来佳奈子「“都市公園における遊具の安全確保に関する指針”と海外指針・規準との比較」『造園技術報告集』2号, 2003年, 22-25頁。
- 4) Health & Safety in Children's Centres *Model Policies & Practices* (2nd edition revised), The University of New South Wales, 2003年。以下のサイトで閲覧可能である(平成26年10月9日接続確認)。http://www.community.nsw.gov.au/docswr/_assets/main/documents/childcare_model_policies.pdf
- 5) 保育者の精神障害や燃え尽き症候群については、数多くの研究が行われている。以下に示したのは代表的な研究である。村田勉「保育者のストレス状況とその要因」『白梅学園短期大学紀要』32号, 135-147頁, 1996年。植田智「保育士におけるバーンアウト」『鳥取短期大学研究紀要』45号, 39-47頁, 2002年。磯野富美子・鈴木みゆき・山崎喜比古「保育所で働く保育士のワーキングモチベーションおよびメンタルヘルスとそれらの要因」『小児保健研究』67号(1), 367-374頁, 2008年。坂本裕・小山徹・一門恵子「幼児教育担当者のバーンアウト(燃え尽き症候群)に関する調査研究」岐阜大学教育学部『教師教育研究』第7号, 47-54頁, 2011年。

また、保育者の流産については、昔から「保母の職業病」とされ、以下の論文では、職業病認定闘争が行われてきた歴史について論じている。西垣美穂子「保育職業病認定闘争の意義と課題—1960年代～70年代の保育運動・保育労働をめぐる—」『佛教大学社会福祉学部論集』第10号, 11-32頁, 2014年。

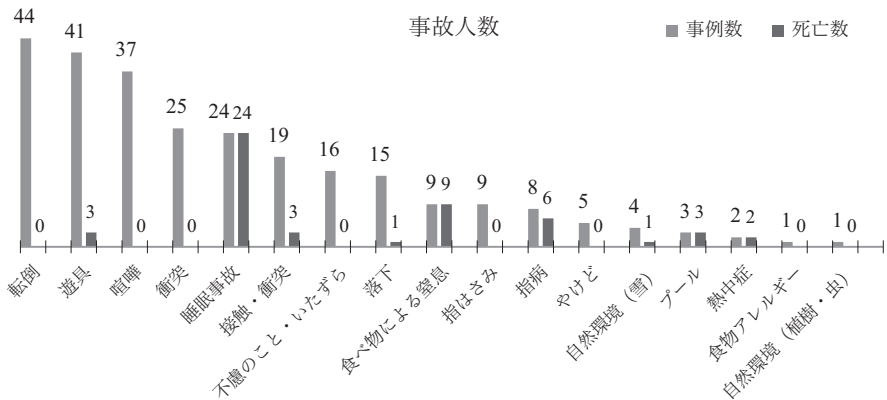
- 6) 保育施設における子どもの事故の現状を把握するため、消費者庁と独立行政法人国民生活センターが連携して事故情報や危険情報を収集している「事故情報データバンクシステム」と、独立法人日本スポーツ復興センターが災害救済給付において給付した事故事例について検索できる「学校事故事例検索データベース」の2点を利用し、実態を調査した。その結果、過去約10年間に263人の子どもの関わる事故が起きていることが分かった。これらのデータベースで得られたデータをもとに、事故の「領域」「下位領域」「事故数」「代表的事例」を示したのが以下の表である。

「保育施設における事故」(平成26年6月調査結果)

領域	下位領域	事例数	代表的事例
食	食物アレルギー	1	平成25年6月／給食時／6歳児 除去食をお願いしてあるにも関わらず、昼食の給食後に卵アレルギーを持つ子どもに症状がでた。
	窒息	9	おやつ時／1歳男児 保育者は本児を検温した後、連絡ノートへ検温の記録をするため目を離した隙に、白玉団子を口に入れてしまい、苦しみだした後に意識を失う。白玉団子を除去するが、意識は回復せず、集中治療室で処置を受けるが、数日後に死亡した。
園庭	遊具	41	園庭にて保育中／3歳女児 雲梯の上部に腰かけて遊んでいたところ、棒と棒の間から体がすり抜け、1mほどの高さから地面に落下する。後ろ向きの体勢で落ちたため、受け身を取ることが出来ず、右腕を打って、上腕部を骨折する。
	プール	3	平成25年7月／プール／4歳男児 水深約20cmのプールで、意識を失いあおむけに浮いているのが発見された。病院に搬送され、救命措置を受けたが後日死亡した。
	自然環境(雪)	4	平成24年6月／園庭にて保育中／6歳男児 園庭で集団から外れ4名で遊んでいたところ、保育所の屋根からの落雪に巻き込まれて生き埋めとなる。4名中3名が軽傷、残り1名は死亡した。
	自然環境(植樹・虫)	1	園庭にて保育中／6歳女児 鬼ごっこをしている際に、地上から約90cmくらいに張り出した枝で右目を突き、損傷を受けた。
施設全体	転倒	44	保育室にて保育中／1歳男児 部屋の入口へ走って行き滑り、入口の柱に当たり左頬を切る。
	衝突	25	保育室にて保育中／4歳男児 保育室の入口付近で数人の子ども達が遊んでいて、本児が部屋から出ようとした際、入口が閉まったので、誤ってガラスにぶつかり、右前腕が切れて出血した。
	落下	15	園庭にて預かり保育中／6歳女児 園庭の栗の木からイガ栗を落としていたところ、近くにいた本児の顔面に直撃し、左眼球に怪我を負った。また、顔面にも栗のイガが刺さった。
	指はさみ	9	給食準備中／1歳女児 保育者が開閉式の食事用テーブルを出している時に、園児が手伝いに来て、テーブルの足の開閉部分に指を入れて挟んでしまい、損傷してしまう。
	やけど	5	保育室にて保育中／1歳男児 本児は2歳児保育室にて、出ていた加湿器のコードを引っ張り、加湿器を倒して中の湯を浴びた。左頬下から顎、胸にかけて熱傷となる。
	子ども同士	37	保育室にて保育中／4歳女児 他児が本児に荷物を取らせないように手で囲うようなそぶりをしたため、どいてもらおうと本児が他児にぶつかり、怒った他児が本児の顔を叩き、その時爪で左頬を引っ掻いてしまう。
子ども同士	接触・衝突	19	園庭にて保育中／4歳女児 昼食後、本児が外に出ようとしたところ、左側から走ってきた他児と衝突し、左肘をついて倒れた。保育者が擦りむいていた両肘を消毒した際、左手に全く力が入らず、左手全体の形が異常だということに気づき、病院へ行くこととなった。
	不慮のこと・いたずら	16	給食時／3歳男児 給食を食べる直前に、隣に座っていた他児が本児の左の耳の穴に箸を入れてしまい、聴力障害を伴うこととなる。

病気	睡眠事故	24	午睡／3歳男児 午睡終了時刻となっても、本児が起きなかったため、担任が声掛けをしたときに異変に気付いた。救急車を要請し、病院に運ばれるが死亡した。
	熱中症	2	平成17年8月／園内にて保育中／4歳男児 かくれんぼをして遊んでいる最中に行方不明となったため捜索していたところ、廊下に設置してある木製棚の中で意識不明の状態で見えられた。救急車で病院搬送し、救命措置を受けたが死亡した。
	持病	8	保育室にて保育中／0歳男児 イスにつかまり立ちをして遊んでいた時に、突然その場に座りこみ、痙攣らしき動作をして顔面蒼白となり、近くの病院の小児科へ搬送した。直ちに心肺蘇生術を施したが、約1時間後に死亡が確認された。

過去10年間で、263人の子どもが障害を持ってしまうような怪我を負い、そのうち52人の子どもが死に至っていることがわかった。事故内容については、転倒事故が44人で最も多く、次に遊具事故で41人、その次は子ども同士による喧嘩で37人となっている。命を落とした52人の子どもの約半分が睡眠事故によるものであり、以下の表から、睡眠中に起きる事故や食べ物を喉に詰まらせ窒息してしまう事故に関しては、高確率で命を落としてしまうことがわかる。



保育施設における事故の内容と人数

- 7) 国土交通省編「都市公園における遊具の安全確保に関する指針（改訂第2版）」、2014年発行。
以下のサイトで全文を参照可能である。www.mlit.go.jp/common/000022126.pdf また改訂のポイントについては、以下のサイトに詳しい。<http://www.mlit.go.jp/common/000022124.pdf>（いずれも平成26年10月31日接統確認）
- 8) 日本公園施設業協会編「遊具の安全に関する規程 SPFA-SP-S: 2014」2014年発行。
- 9) 国土交通省指針、「本書の読み方」の頁、下から3行目～最終行。
- 10) 国土交通省指針、8頁
- 11) 国土交通省指針、13頁
- 12) 国土交通省指針、27頁
- 13) 国土交通省指針、37頁
- 14) 国土交通省指針、68頁
- 15) 国土交通省指針、42頁、囲み部分
- 16) 遊具事故を減らすために運動を続けている松野敬子はその論文のなかで「かつて、私は、遊具の事故防止の“切り札”になるはずとの思いで安全基準の誕生を願っていた。思いがけず、それは早期に実現したが、では、遊具での事故が激減したかといえば、残念ながらそうはならなかった」と述べ、安全基準ができて安全にならないのはリスクマネジメント不全があるからだと言っている。松野敬子「遊具事故を防止するために—ソーシャル・リスクマネジメントからのアプローチ—」関西大学経済・政治研究所『セミナー年報 2010』175-186頁、2010年、185頁。

- 17) 厚生労働省『保育人材確保のための“魅力ある職場づくり”に向けて』平成26年8月によると、「平成29年度末における保育士数は、約7.4万人不足」と試算されており、保育士の不足の背景として「指定保育士養成施設卒業者のうち、約半数は保育所に就職していません」「保育士資格を有しながら保育士としての就職を希望しない求職者のうち、半数以上が勤務年数5年未満であり、早期離職の傾向も顕著です」と指摘している。保育士として就業を希望しない理由は、「賃金が希望と合わない(47.5%)」「休暇が少ない、休暇が取りにくい(37.0%)」「責任の重さ・事故への不安(40.0%)」が指摘されている。<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11601000-Shokugyouanteikyoku-Soumuka/0000057898.pdf>にて閲覧可能(平成26年12月23日接続確認)。
- 18) 日本保育士協会調査研究部編『保育士不足が保育現場に与える影響についての調査報告書』平成26年3月。この報告書は、「全国の保育現場に目を向けると、保育の鍵となる保育士が不足し、その採用は困難を極めている。とりわけ民営保育園では、多くの園で自園の保育の条件に見合った保育士を採用することができず、質の高い保育サービスの継続的な提供が不安視されている。」という問題意識から、「深刻化する保育士不足問題が保育園運営や保育の質に与えている影響」について、その実態を明らかにすることを目的に調査を行っている。http://www.hoikushi-kyo.jp/news_pdf/cyousa.pdfにて閲覧可能(平成26年12月23日接続確認)。

【参考資料1】オーストラリアの安全基準の目次の翻訳

謝辞

著作権許可

序論

このガイドの使い方

発展しつつあるポリシーのための枠組み

発展しつつある健康と安全のシステム

モデルとなるポリシーと実践

伝染病の予防

1. 感染予防

- 1.1 感染予防のための一般的なルール
- 1.2 手洗い
- 1.3 排泄
- 1.4 おむつ替え
- 1.5 鼻をふく
- 1.6 血や体液との接触
- 1.7 掃除

2. 伝染病

- 2.1 伝染病あるいは急病の子どもの隔離
- 2.2 深刻なあるいは潜在的な伝染性の病気の評価
- 2.3 伝染病のケースにおける通知手順

3. 免疫

- 3.1 免疫の管理

病気やその他の状況への対応

4. 薬物投与と手当の対応

- 4.1 薬物投与の対応

- 4.2 急な発熱のある子どもの対応
- 4.3 医学的な手当の介入を必要とする慢性疾患をもつ子どもの対応
- 4.4 針やとがっているものの取扱い，利用，処理
- 5. 喘息・糖尿病・癲癇（てんかん）・食物アレルギー，アナフィラキシーをもつ子ども達の対応
 - 5.1 喘息もちの子ども達の対応
 - 5.2 糖尿病もちの子ども達の対応
 - 5.3 癲癇（てんかん）もちの子ども達の対応
 - 5.4 食物アレルギーとアナフィラキシーの対応
 - 5.5 深刻なアレルギーとアナフィラキシーのリスクの軽減
- 6. その他の医学的状況
 - 6.1 SIDS（乳幼児突然死症候群）のリスク軽減と乳児の睡眠事故の防止
 - 6.2 歯と口の健康
 - 6.3 再発性中耳炎の対応と予防
 - 6.4 窒息時の対応

緊急時の対応

- 7. 緊急時の手順
 - 7.1 緊急時の手当の権限
 - 7.2 救急車を呼ぶための手順
 - 7.3 応急手当の情報と連絡先
 - 7.4 火事と緊急避難の手順
- 8. 連絡
 - 8.1 急な病気やけがの場合の家族への連絡
 - 8.2 病気やけがの記録をつけること
 - 8.3 緊急時に医療専門職と情報交換すること
 - 8.4 守秘義務
- 9. 法律と保険
 - 9.1 法律と保険の適応範囲

食の安全、栄養と身体活動

- 10. 食の安全、栄養と身体活動
 - 10.1 安全な食べ物の取り扱い
 - 10.2 食べ物・栄養・教育
 - 10.3 身体活動

屋内と屋外の安全の管理

- 11. 屋内の安全性
 - 11.1 屋内の安全チェックリスト
 - 11.2 汚れたおむつの清掃・廃棄・保管
 - 11.3 子ども達とペットや動物との接触
 - 11.4 おもちゃの安全
 - 11.5 保育園の家具や設備の安全
- 12. 屋外の安全
 - 12.1 屋外の安全チェックリスト
 - 12.2 遊び場の遊具
 - 12.3 蛇・蜘蛛・昆虫に対する予防策

- 12.4 太陽の安全
- 12.5 プールと水の安全
- 12.6 危険性のある植物
- 13. 他の環境面での危険性
 - 13.1 建物のメンテナンスチェックリスト
 - 13.2 改築の手順
 - 13.3 鉛の露出防止
 - 13.4 アスベストの露出防止
 - 13.5 農薬の安全な使用
 - 13.6 危険な化学薬品・物質・道具の保管
 - 13.7 屋内のアレルゲン
- 14. 旅行と遠足
 - 14.1 旅行と遠足の安全とチェックリスト
 - 14.2 安全な遠足の場所
 - 14.3 農場での子どもの安全の予防策
- 15. 子ども保護
 - 15.1 子ども保護の実践

保育スタッフのための健康と安全

- 16. 保育スタッフの健康と安全
 - 16.1 バックケアと補助
 - 16.2 ストレス管理
 - 16.3 保育スタッフの免疫化と伝染病問題
 - 16.4 ゴムアレルギー
- 17. 妊娠中の保育スタッフの健康と安全
 - 17.1 妊娠中の保育スタッフのバックケア・補助・その他の健康問題
 - 17.2 妊娠中の保育スタッフのストレス管理
 - 17.3 妊娠中の保育スタッフの免疫化と伝染病問題

健康の安全に関する情報と付録

- ・省略記号
- ・健康と安全の情報と参考文献
- ・健康と安全に関するインターネット上の情報と参考文献
- ・文化と言語において多様な健康と安全に関する情報
- ・関連する法律

付録

- A 医療の権限フォーム
- B パラセタモール投与の権限
- C 事故・けが・急病の報告用フォーム
- D 「オーストラリア病気の情報交換ネットワーク」によって指定された届出義務のある病気
- E 「オーストラリア健康と医療の研究所」が示した出席停止の最小期間
- F 保育施設の科学物質安全チェックリスト
- G 病院への輸送フォーム

【参考資料2】オーストラリアの「園庭と遊具に関する安全基準」の翻訳

12. 屋外の安全

12-1. 屋外の安全チェックリスト

方針：保育所は屋外の環境における事故や怪我に対し、そのリスクを小さくし、また効果的に対応します。

背景：事故と怪我を防ぎ、また減少させるために、安全な屋外の環境を作り、維持することが大切です。潜在的な危険を知り、危険を減らすか管理し、緊急時には素早く適切に対応することが大切です。このチェックリストは、屋外の安全を定期的に評価し、維持するために重要な問題を強調します。

関連する法律：

- ・設置型と移動型の保育サービス施設の規制第二項（1996年 NSW 州）
- ・職業上の健康と安全の行動2000と規制2001（NSW 州）
- ・スイミングプールの安全、運動場の設備、落下の衝撃緩和に関するオーストラリア基準

重要な情報：

- ・子どもを優先に置くこと：質向上と認定システムの資料集（NCAC, 2001年）：www.ncac.gov.au
- ・小さい子ども達の物理的環境における最もよい実践のガイドライン（Walsh&DOCS, 1996年）
- ・小さい子ども達の交通安全教育プログラムから入手できる「子どもと交通」の情報（マッコーリー大学）www.kidsandtraffic.mq.edu.au.

チェックリスト：

- * 自転車と車輪のついた玩具—子どもが自転車や車輪のついた玩具を使うときはいつでも、正しく合うように作られたヘルメットを着用することが推奨されています。
- * 保育サービスにおける自転車や車輪付のおもちゃのメンテナンス、学習計画作成、管理、使用のために書面化したポリシーを作成する際に、さらなる詳細なチェックリストと援助が必要な場合は、「小さい子ども達の交通安全教育プログラム」に連絡してください。
- * 保育所の駐車場：子どもの手を握り、安全なドアから子どもを降ろすなどのような、歩行者安全ルールを家族の一員が確実に意識するようにしてください。乗り物を後退させた結果、生じる事故や怪我を防ぐために、駐車場ではいつも子ども達を監視することを家族に促してください。
- * 健康と安全を犯す危険性について、定期的に屋外の場所や遊具をチェックしてください。
- * 屋外での窒息の危険性（例えば小石など）。
- * 登ったり遊んだりする設備：固定されており、メンテナンスされ、関連するオーストラリアの基準を満たしていること。安全に使うように子どもに教えます。
- * 屋外の遊び場のすべての側面を、道・水の危険・車道から安全にそして効果的にフェンスで仕切ってください。正しい高さを持ち、出入口にはこどもに安全な自動ロックの装置を取り付けて、フェンスを維持すること。
- * 指つめ防止：遊び場の設備にあるすべてのくぼみまたは開口部は、8～25ミリの間でなければなりません。
- * 救急箱は承認を受けた、維持された、手の届きやすい、現在の救急証明のついたものであること。
- * 庭の瓦礫は取り除かれ、園芸用品はしまわれて鍵がかかっており、枝や茂みは定期的に刈り込んでいること。
- * 危険な植物はその存在を明らかにし、取り除くか、子ども達の手が届かないようにすること。

- *機械類・道具・用品はすべて電源が入り作動することを確認し、あるいは他の危ない用品、道具または機械類は安全にしまわれ、子ども達が近づけないようにすること。
- *ペットや動物の糞尿は、きれいにしておくか、屋外において子ども達が近づけないようにしておき、犬は子どもの遊び場から遠ざけ、ペットは指の入らないケージの中に入れ、ペットと子ども達のふれあいは監督のもとに行います。
- *プールの安全性は、フェンスと門を付け、浅いプールは使用後すぐにからにして、ひっくり返して裏返し、汚れたら消毒します。
- *詳細を記録し、いかなる子どもの事故についても保護者に伝えます。
- *安全な遊びのルールと十分に安全な遊び場で子ども達に安全に遊ぶ方法について話します。子ども同士の衝突を回避するように、屋外の遊び場の安全なレイアウトを維持してください。
- *砂場—使わないときにはカバーをかけ、定期的に掃除をし、糞や血によって汚れた砂を掻き集めて取り除きます。汚れた砂やものを取り除いたあとは、1日の終わりに砂場に水をまいておくこと。
- *蛇・蜘蛛・昆虫—これらのものが施設内に入らないようにしておくこと。その危険について子ども達に教えておくこと。
- *衝撃緩衝—屋外の登ったり遊んだりする遊具の下には、適切な地面カバーを取り付け、基準を満たすこと。
- *太陽光線予防。帽子をかぶり、日焼け止めをします。日よけのない場所では、太陽が照り付けている時間は遊びを最小限にします。砂場と遊び場の上には日よけをつけます。
- *子どもを監督し、見える位置にいます。いつ何時も子どもが見え、監督されていることを確認すること。リスクの高い場所は登る遊具、あるいは他の屋外の遊具です。危険性のある遊具、機械類、薬品類、他のいかなるものにも、子ども達が近づかないようにすること。
- *水の危険。表面を覆い、子ども達が近づけないようにすること。例えば、池、ダム、温泉、小川、おむつバケツ。

「小さい子ども達の交通安全教育プログラム」によって開発された「子どもと交通」という無料の資料キットが、10人以上の子どもを預かるNSWに認定された子ども施設において利用可能です。このキットには、パズルや物語、パネルシアターの物語などを含んだたくさんの役立つ交通安全教育の資料が含まれています。ここでは、小さい子ども達の施設に対し、交通安全教育についての無料の専門性を高めるワークショップも提供しています。番号：(02)-9850-9882または彼らのウェブサイト www.kidsandtraffic.mq.edu.au を訪問してください。屋外の安全に関する他の情報源：キッドセーフ（車輪の上の子ども）です。

12-2. 園庭の遊具

方針：保育施設は、園庭の遊具に関する事故やけがのリスクを最小化するとともに、それらに効果的に対応できるようにします。

背景：園庭の遊具に関連する怪我は、オーストラリアの病院にかかった子ども達の3番目に多い理由となっています。遊び場関連の怪我のひどさに影響を与える主要な要因は、遊具の高さと地面の表面材です。保育施設で起こる3分の2の怪我は、園庭の遊具から落ちること、園庭において生じており、骨折や骨のひびわれのうちの半分以上が、園庭の遊具からの落下からくるものです。保育施設における子どもの怪我に関連するもっともよくある園庭の遊具は、滑り台、よじ登る遊具、ブランコです。遊具のよいデザイン、適切なやわらかい地面と、技術の高い子どもの見守りとが組み合わせられることが、重要な予防の戦略となります。適切な柔らかい地面は、落下が生じてしまった際の、頭の怪我や、脳の損傷を最小化するうえで特に重要となります。

関連する法令：

- ・設置型および移動型の保育サービス施設の規則の第二項（1996年 NSW 州）
- ・職業上の健康と安全の行動2000と規則2001（NSW 州）
- ・園庭の遊具と落下の衝撃緩和に関するオーストラリア基準

重要な資料：

- ・子ども優先：質向上と認定システムの情報ブック（NCAC, 2001年）：www.ncac.gov.au
- ・NSW 州の保育所の家具と遊具のチェックリスト（Walsh&DOCS, 1996年）
- ・園庭での安全に関する事実ファイル、園庭に関するアドバイス集（NSW 子どもの安全）

実践：

園庭の遊具に関する事故のリスクを最小化するために、保育所は以下のことをしなければなりません。

- * 園庭の遊具が現在のオーストラリアの規準を満たしているか、信頼できる業者から購入されているか、定期的に点検され維持されているか確認してください。
- * 園庭の遊具が安定し、危険なく、安全で、よい状態に維持されていること、そして現在のオーストラリアの規準に照らし合わせて子ども達にとって年齢にあった適切な高さであることを確認してください。
- * すべての遊具が、子ども達が引っかかったり、巻き込まれたり、窒息したり、はさまれたり、押しつぶされたり、あるいは、突起物や、とんがったざらざらした角、さびなどによって怪我をしまうような危険性がないことを確認してください。
- * すべての遊具が、ひとつも小さな部品をもたないこと、それが壊れて取れて、小さな子ども達にとって窒息の危険性とならないように確認すること。
- * 子ども達が外で遊ぶ前に園庭を常に調査し、子ども達の遊具での遊びが適切な方向に進んでいることを確認してください。フード、紐、コードは潜在的な窒息の危険になりえます。
- * 50センチを超える高さの遊具には、少なくとも深さ25センチ、遊具の周囲1.9メートルに衝撃吸収材を敷いていることを確認すること。園庭の遊具は、小道や硬い花壇の縁から離して設置すること。
- * 遊具の下と周囲を覆っている衝撃吸収材は、オーストラリアとニュージーランドの規準（AS/NZS4422, 1996年）を遵守していること、定期的に維持され、材料は掻き出し、再度敷き詰める必要があるかもしれないこと、そして毎週、蜘蛛や、鋭利なもの、動物のごみなどがいないかチェックすることを確認すること。
- * 常に子ども達を監視し、園庭の遊び場は目の届くこと、こどもが園庭にいるとき、よく使うもの（例えばティッシュ、電話、日焼け止め、救急箱など）は手の届くところに置いておくこと。
- * RTA は、9歳未満の子ども達は、保育所において、自転車、スクーター、スケート、スケートボードを使わないことを推奨しています。これらを用いる子ども達は、適切な場所にヘルメットとパッドをつけなくてははいけません。
- * 十分な場所を確保できるときのみ、保育所の園庭にブランコを設置することができます。

参考：

屋外の園庭の遊具に関して、安全に関するさらなる詳細な情報が必要な場合は、上記にリストアップされた主要な情報をご覧ください。「子どもの安全」における「NSW 園庭に関するアドバイス集」は、園庭の安全とデザインに関して利用可能なさまざまな「事実シート」を保有しています。これらは、園庭の規準や、園庭の遊具のガイドラインについての情報、あるいは、移動遊具、カービーズ、砂場、トランポリン、自然の遊び場などについての理解、点検、メンテナンスについての情報を提供してくれます。これらは「子どもの安全」へ電話(02) 9845-0890あるいは、web サイト (www.kidsafensw.org) からの注文書により取り寄せることができます。

12-3. 蛇、蜘蛛、昆虫に対する注意

方針：保育所は、蛇、蜘蛛、昆虫にかまれたりさされたりするリスクを最小化し、これらに効果的に対応していきます。

背景：オーストラリアには、かんだり、さしたり、毒をもつ、たくさんの動物と昆虫がいます。保育所は、蛇、蜘蛛、昆虫にかまれたりさされたりするリスクを最小限にし、子ども達にこれらの危険について教えなければなりません。

関連する法令：

- ・設置型および移動型の保育サービス施設の規則の第二項（1996年 NSW 州）
- ・職業上の健康と安全の行動2000と規則2001（NSW 州）

主要な情報源：

- ・より良い健康チャンネル：www.betterhealth.vic.gov.au
- ・Westmead（ウェストミード）にある小児病院：www.chw.edu.au

実践：

蛇、蜘蛛、昆虫にかまれたりさされたりするリスクを最小化し、効果的に対応していくために、保育所は以下のことをしなければなりません。

- *子ども達に蛇、蜘蛛、ミツバチ、蜂などの昆虫の危険性について教え、特に園庭にいるときには、これらの昆虫を捕まえたり、触ったりしてはならないことを彼らに教えなければなりません。
- *子ども達が入ることのできる園庭、特に砂場、園庭のおもちゃ、小さい小屋などにおいて、蛇、蜘蛛、ゴキブリ、他の昆虫や害虫の痕跡がないか、毎日確かめなければなりません。
- *子ども達の遊ぶ場所や出入口付近に、昆虫が好む植物を置くことを避け、巣や蜂の巣を見つけたら速やかに取り除くこと。
- *夜は砂場にカバーをかけて、毎朝砂をかき、草、芝生、花壇の世話をし、蛇や蜘蛛や昆虫や、他の危険物がないか定期的にチェックすること。
- *クローバーや野花の近くなど、ミツバチやスズメバチが集まる近くで子ども達を遊ばせないこと。
- *子ども達は、足を覆う靴や長ズボンなどのような、適切な保護されている服を身につけさせること、そして、長い草や茂みの土地を通って歩く場合は、虫よけスプレーを使うこと。もし、蛇や爬虫類、蜘蛛が姿を現したら、刺激したり、捕まえたりしないこと。
- *子どもがかまれたり、さされてしまったとき、あるいは、かまれたり、さされたりすることに対してアレルギー反応が起きた場合などに備えて、応急処置が提供できるように、適切にトレーニングを受けたり、準備をしたりしておくこと。
- *ミツバチ、スズメバチ、蟻に対してアレルギーのある子どもは、医学的な警告を示すブレスレットを身につけさせるようにし、保育スタッフは応急処置と緊急時のアシスタントを提供できるように訓練しておかなければなりません。（4.1医療の管理と、5.5の重篤なアレルギーとアナフィラキシーのリスクの軽減も参照のこと）

12-4. 太陽の安全

方針：保育所は、太陽に当たることによる危険性や悪い影響から子ども達を守らなければなりません。

背景：オーストラリアは、世界中で皮膚がんの発生率が1番高く、幼児期の間に太陽に身をさらすことは皮膚がんと黒色腫へと進行してしまうリスクを著しく増加させます。砂、コンクリート、水は日光を85%まで反射することができ、紫外線への暴露をさらに強めてしまいます。保育士と保育所は、長期的に皮膚がんを防ぐことにおいて非常に重要な役割を果たすことができ、小さい子ども達に健康的な太陽に関する習慣を教えることで、子ども達が施設にいる間に、過剰な太陽の暴露からのリスクを防ぎ、減少させる責任を持っています。

関連する法令：

- ・設置型および移動型の保育サービス施設の規則の第二項（1996年 NSW 州）
- ・職業上の健康と安全の行動2000と規則2001（NSW 州）
- ・太陽保護服，サングラスとブラインドクロスのアーストラリア基準

主要な情報源：

- ・NSW 州の保育所の会議：www.cancercouncil.com.au
- ・子ども達の安全を保つ：育児支援のためのサンスマート方針と情報，NSW 州の保育所議会（1996年）
- ・子ども達の支援において太陽保護の良い実践道具の案内，NSW 州の保育所の会議と健康の NSW 部門（2003年）

実践：

太陽に身をさらすことによる結果から子ども達を保護するために，保育所は以下のことをしなければなりません。

- * 太陽に関する安全措置は，1 年中とられる必要があり，暑い日だけでなく，曇りの日や冬であっても，また子どもが日陰で遊んでいるときであっても，有害な紫外線は建物，水，草，コンクリート，砂から，子どもに影響を及ぼしうることを認識すること。
- * どんな状況でも，日光のもとに直接，赤ちゃんや幼児を置くことのないようにすること。
- * サマータイム（10月下旬から3月下旬）の11時から15時の間，そしてそれ以外の時期の10時から14時は，太陽光線のもっとも強い時間帯を避けて屋外の活動を計画し，屋外における活動は，どこであっても可能な限り日陰で組織すること。
- * 外で遊ぶとき，または屋外に遠足に行くときには，すべての子どもが，長そでシャツ，長ズボン，つばの広い帽子，サングラス，SPF30以上の日焼け止めなど，適切な太陽防護服を着ること，そして保護者にそれを準備してもらうようにすること。
- * 太陽から身を守ることにについて，子ども達とゲームや歌で表現していくこと。「SLIP で長そでのシャツを着よう！ SLOP で日焼け止めに塗ろう！ SLAP で帽子とサングラスを身につけよう！日陰で遊ぼう！日の高いうちは太陽の当たらないところにしよう！」
- * すべての保育所スタッフは，園庭や屋外での遠足の時に，やはり太陽保護服，帽子，サングラス，SPF30+ の日焼け止めをして，模範となるように心がけること。
- * ボトルに書いてある指示通りの量で日焼け止めに塗ること。
- * 日焼け止めは，子ども達が外に行く20分前に，きれいな乾いた皮膚に塗り，そして子ども達が外で遊び続けるようなら，外に行く前や2時間おきに塗りなおすべきであることを意識していること。子どもひとりずつに対し，ティッシュを使って日焼け止めに塗ることにより，衛生に気を付けること。
- * 屋外の遊び場すべてに十分な日陰があり，毎年日陰検査を行い，適切な日陰をつくる木を植えたり，日陰を作るものを設置したりすること。

12-5. プールと水の安全

方針：保育所は，スイミングプールと子ども用プールと他の水の危険性に関連する，子どもの事故と病気を予防し，規則を遵守します。

背景：溺死は，オーストラリアの1～4歳の子ども達の主要な死因となっています。溺死の大部分が裏庭のスイミングプールで起こっている一方，子ども達はわずか（少なくとも）5 cm の水で溺れうることを意識しておくことが大切です。子どもの怪我と病気に関連する他の水における危険性は，おむつ用のバケツ，トイレ，子ども用プール，温泉，浴槽，魚を飼う池，噴水，ペットの飲料ボトル，ダム，小川，湖，ビーチなどがあります。

関連する法令：

- ・設置型および移動型の保育サービス施設（育児支援施設）の規則の第二項（1996年 NSW 州）
- ・職業上の健康と安全の行動2000と規則2001（NSW 州）

・スイミングプールの安全に関するオーストラリア基準

主要な情報源：

- ・ Westmead (ウェストミード) にある小児病院：www.chw.edu.au
- ・ 子どもとあなたの健康：www.cyh.com
- ・ 保育における健康維持 (NHMRC, 2001 年)：<http://www.health.gov.au/nhmrc/>
- ・ 市民プールと温泉のガイドライン (1996 年)

実践：

スイミングプールと子ども用プールと他の水の危険性に関連した、子どもの事故と病気を予防し、規則を遵守するために、保育所は以下のことをしなければなりません。

- * 設置型および移動型の保育サービス施設の規則の第二項 (1996 年 NSW 州) の開始後、建物内にスイミングプールを取り付けてはいけません。
- * スイミングプールが保育所に存在するならば、プールの囲いと扉に関するオーストラリアの基準を遵守していることを保証します。プールの囲いと扉が正確に機能しているか確認するため、定期的にプールの囲いと扉をチェックします。適切に塩素で消毒します。
- * 丸太、木、自転車、椅子、ゴミ箱など柵を乗り越えるために、子どもが使いうるものを、プールまたは他の水の危険性の周りからすべて取り除きます。
- * 子どもが以下のことをせずに、スイミングプールで泳ぐことがないようにします：
 - 水の安全と水泳を学ぶための親または保護者からの許可証
 - 適切な大人と子どもの比率が保たれていること
 - 応急手当の証明書を持ち、水の安全と救出手順に関して経験があると認められる人によって監視されていること。
- * どんな時でも子ども達が水の近くにいる際は近くで見守り、少量の水であっても決して近くに子どもを一人にしておくことがないようにすること、子ども達が水遊び用プールを使っている時は、少なくとも 2 人の大人により見守りをする。
- * 心肺蘇生術 (CPR) の手引きを常にプールの近くに置いて保管すること、プールのフィルターと化学薬品が子ども達の手の届くところがないことを確認すること、子ども達にプールと水の安全を教えること。
- * すべての水の入ったもの (例えば池、温泉、おむつ用のバケツ、浴槽) に安全な覆いをかけ、子どもが近づかないようにすること、そして子どもの遊び場は水の危険 (例えばダム、小川、湖、灌漑水路、井戸) から、安全にフェンスで仕切られることを確認すること。
- * 子ども用プールは使用後すぐに空にして、水のたまることがないように保管する (例えば、立てかけて置くなど)。また、雨や水まきの後は、庭をチェックし、くぼみや容器に水がたまっていないかチェックをする。
- * 水遊び用のプールが適切に消毒されて、塩素で処理されていることを確認します。
 - ホースで水をかけ表面のほこりを洗い流し、内側を消毒液でこすることにより、毎日葉やゴミを取り除くこと。
 - プールに水を入れる前に消毒液をゆすぎます。
 - 子どもがプールに入る前に、適切にプールを塩素消毒します (第 14 章 6 節「薬品の保管と取扱い」を見る)。
 - 定期的に塩素濃度をチェックします。
 - 下痢、胃の不調、傷口がある、または鼻感染症の子ども達はプールを使うべきではありません。
 - すべての子ども達は、清潔な水着を着るべきであり、プールに入る前に正しい排泄時の衛生的実践をした上で、トイレに行くべきである (衛生的実践……おしりを綺麗に拭くということ)。
 - プールに入っている時に子どもが排便した場合は、すぐにプールからすべての子ども達を出し、プールを空にして消毒します (伝染病の管理の章を参照のこと)。

- ＊市民プールと温泉のガイドライン（1996年）に従い、スイミングプールを維持します。
- プールの安全の他の引用は以下の通り：
- ・公正取引庁「プールの安全性のチェック」
 - ・公正取引庁「空気注入型スイミングプール：供給者に関する安全ガイドライン（2001年）」

12-6. 危険な植物

方針：保育所は、危険な植物に関する子どもの事故のリスクを最小化にします。

背景：屋内および屋外にある多くの植物は、子ども達に健康上、安全上の危険をもたらします。いくつかの種類の植物は食べた場合に、中毒を起こす可能性があり、また、いくつかの植物の中にはアレルギーや怪我を引き起こすものがあります。オーストラリアにおける危険な植物の一般的な例は、下記に記載しています。

関連する法令：

- ・設置型および移動型の保育サービス施設の規則の第二項（1996年 NSW 州）
- ・職業上の健康と安全の行動2000と規則2001（NSW 州）

主要な情報源：

- ・Westmead（ウェストミード）にある小児病院：www.chw.edu.au
- ・Queensland（クイーンズランド）政府による健康：www.health.qld.gov.au
- ・小さい子ども達の物理的環境に関する最善の実践のためのガイドライン（Walsh&DOCS, 1996年）
- ・遊び場に関する植物（キッドセーフ NSW）：www.kidsafensw.org

実践：

危険な植物との接触に関する子どもの事故に効果的に対応し、リスクを最小化するために、保育所は以下の通りにしなければなりません。

- ＊屋内でも屋外でも有毒な植物を見分け、子ども達が容易に接近できないことを確認し、それらを排除するか、すべての子どもが接触しないようにします。
- ＊サボテン植物、薔薇の茂み、ベリーのように怪我、皮膚刺激、または窒息を引き起こしうる潜在的に危険な植物を発見し、それらに子ども達が近づくことのないように確認すること。
- ＊重大な中毒を引き起こしうる植物を、取り除くか子ども達から離します。一般的な例は、ルイボス、エンジェル・トランペット、アトリウム・ユリ、アザレア・キョウチクトウ、ヒマシ油植物、栗、スイセン、ベラドンナ、ディフェンバキア（象耳）、セイヨウキヅタ、ジギタリス、ヒアシンス、アジサイ、アイリス、ランタナ、モートン湾イチジク、ロザリオ豆、ダイオウ、ウルシ、ヌマヒノキ、フジです。
- ＊有毒植物がどれであるかを見分けるのを助けるために、可能な限りいろいろな場所に写真付きの植物の説明を貼っておくこと。地方自治体は点検をすることができ、また、有害な雑草を抑えることについてアドバイスを与えることができます。
- ＊子ども達が植物の近くにいる時はいつも見守り、屋内または屋外にある植物またはベリーを口や鼻に入れてはいけないことを、子ども達に教えます。
- ＊有毒な植物を食べることは、胃腸（吐き気、嘔吐、腹痛、腹部の痛み）、心臓（変則的または速い心拍）、皮膚（口または皮膚の発疹の発症）、そしてアレルギー（じんましん、呼吸困難、喘鳴、喘息、アナフィラキシー）のようなさまざまな症状の原因となることを知っていなければなりません。